

女性の社会進出

アラブ世界では、女性労働参加率の向上が経済成長を加速させうる
しかし、簡単には越えられない壁がある

ナジラ・ファティ

中 東・北アフリカ地域を席卷した2011年の動乱を経て、この地域で女性が果たす経済的な役割には一定の拡大があった。少なくとも、書面上では拡大したことになる。しかし、この記事が示すように、この地域で女性が働くこと、ましてや起業して経営を行うことは、いまだに難しい。そして、事業の成功には多くの場合、支えてくれる親族の男性の力を借りる必要がある。

アマル・ドラグマ・マスリはアラビア語と英語のバイリンガルメディア『ミドルイースト・ビジネスマガジン＆ニュース』を世に送り出す前に、その土台固めに13年間に費やした。マスリは必要なネットワークと経験を得るためにPRメディア会社のオーガリット・グループを1999年に創設した。雑誌を立ち上げた2012年には、この雑誌が経済的に必ず成功する計画をまとめれば、女性企業家への偏見を克服できるのではないかと彼女は思っていた。

ヨルダン川西岸地区の都市ラマッラーに住むマスリは「女性には2つのタイプがあるわ。女性と、強い意志を持つ女性よ。ここで女性が成功するためには、意思が固くないといけないわ」と語る。

しかし、マスリがすぐに学んだことがある。発展の見込みを踏まえると、意思が強い女性であっても、起業するような動機はほとんど感じようがなかったのだ。アラブ社会では、男性が家族の主な養い手だと考えられており、女性の夢や思いがあまり考慮されていなかったため、現地の法律に基づく、マスリの雑誌は女性が経営する事業としての要件を満たさなかったのである。マスリは、融資を受けられなかった理由について、他の女性経営企業が生産する刺繍やハンドクラフトのような製品ではなくサービスだと見なされたからだという説明を受けた。マスリは融資申請時に、抵当とな

りうる不動産を所有していた夫を連帯保証人として署名させる必要があった。しかし、夫が関与したことで、マスリは女性経営企業を対象とした5年間の税控除を受ける資格を失ってしまった。

今日、49歳のマスリは5人の社員を雇っている。その1人は21歳になるマスリの娘で、動画の担当者だ。そして、マスリのメディアは有料購読者と広告主も集めることができた。

マスリによると、事業発展の鍵は夫だった。3人の子
どもを持つ母親である彼女は「夫なしには、成功でき
なかったかもしれないわ。子どもを持つアラブ人女性
が仕事をするには、負担を分かち合う意思を持つ男性
パートナーの支援が必要よ」と話した。

中東と北アフリカの女性労働参加率は、国際労働機関 (ILO) による2017年の報告に基づくと21.2%で世界最低である。世界の他の場所では、女性の労働参加率は約40%だ。しかし、若い女性の教育水準は高まり、この地域でも女性が変わるの力となってきた。女性たちはサウジアラビアのような伝統的な国々でも機会の平等を求めてきているのだ。

それでも、進歩はゆっくりとしている。モロッコでは、フェミニスト団体が政府に圧力をかけ、男女差別を禁止する進歩的な法律を採択させたが、このような国々ですら、過去との決別は困難であり続けてきた。家庭や社会では家父長的な態度が支配的であり、多くの女性たちは雇用を得られたとしても、給与の低い仕事にしか就けていない。

社会風土とはまた別の要因が問題をさらに複雑にしかねない。例えばラマッラーでは、イスラエルが国境を閉鎖し、人々の移動を制限してしまった。その後、女性をそれまで雇用してきた繊維産業などの会社がこれまでに破産してしまった。2012年には、ヨルダン川西岸地区やガザ地区で女性が労働力に占める割合はたったの17%であった。



マスリは外出禁止令や道路封鎖が彼女の事業にとって問題になったと語った。必要な機材を持ち運ぶのが高つくため「男女を問わず、経営者してみれば、ビジネスに良くないわ」と彼女は言った。

2010年の12月後半に始まった「アラブの春」の抗議運動で、チュニジア中に響き渡ったスローガンには「雇用、自由と尊厳」があった。アラブ世界の失業率は世界で最も高かったが、例えばチュニジアでは27%に達していた。アラブ世界の大学の大半で女子学生が過半数を占めるようになっていたが、男子学生同様に卒業後も仕事を見つけられない場合がほとんどであった。

女性たちは経済的機会の不足にフラストレーションを感じ、2011年に抗議運動が広がったチュニジアや他のアラブ諸国では、その最前線に女性たちが立った。教師と公務員の娘であるリーナ・ベン＝ムフニも抗議の声をあげた1人である。

「雇用について話すとき、当時もそうだったけど、今も私の頭には男女両方のための雇用があるわ。ジェンダーを問わずに、自由や尊厳について考えているの」と彼女は話した。

フリーランス翻訳者として、彼女は革命の震源地からブログで情報を発信した。ザイン・アル＝アービディーン・ベン・アリー大統領の政権が崩壊した後にベン＝ムフニはチ

ュニス大学で言語学を教える仕事を見つけたが、ブロガーとしても積極的な情報発信を続けた。1956年に進歩的な法律が制定されていたにもかかわらず、女性が周辺の立場に追いやられていたことに憤慨していたからだ。

「チュニジアは女性の人権の点で、最も進歩的な国のひとつだと考えられています。しかし、実際には、現実とは違うのです。意思決定を行う地位につく女性はごく少数です。また賃金も不平等で、女性が妊娠するなどの理由から雇用主は男性を優先的に採用します」と彼女は話した。

アラブ世界中の公共空間で男性は日常的に女性の容姿や服装に関する発言を行っており、女性へのこうしたハラスメントは日常茶飯事である。しかし、イスラム教の諸勢力が革命後に台頭したことで、ベン＝ムフニなど夢を持った女性たちは新たな形態のハラスメントに直面し始めた。宗教的に保守的な風土が社会全体に広がってしまい、女性たちが公の場でより能動的な役割を担うようになったことや、伝統を疑うようになったことなどの新しい自由に対して男性たちは猜疑心を抱くようになった。ベン＝ムフニは罵倒されたり、脅迫されたりするようになり、彼女は命が安全ではないと危険に感じるまで事態は悪化した。

「過激主義者は彼らの考えに従わなかったり、批判したりする女性を受け入れられないのです」と彼女は話した。

ベン＝ムフニは2015年に仕事を失った。現在、彼女は34歳だが、両親と同居しており、フリーランス翻訳者として

もっと多くの女性が仕事に就いたら…

最近の国際労働機関(ILO)の報告によると、アラブ諸国の女性労働参加率は世界最低で2017年に21.2%であった。この数値は一貫して上昇しているが、アラブ諸国で男女格差が解消されるまでの道のりはまだまだ長い。こうした国々では76.4%の男性が労働に参加している。ILOの報告書では、湾岸協力会議諸国とイラク、ヨルダンとレバノン、ヨルダン川西岸地区とガザ地区、そしてシリアがアラブ諸国として考慮されている。

男女格差が問題となる理由は何だろうか。経済成長の源泉が新たに見つかりにくい環境では、女性の労働参加を向上させることが、中東・北アフリカでの経済成長を加速する1つの方法になりうるのだ。

2014年に先進国と新興市場国で構成されるG20の首脳たちは2025年までに労働参加の男女格差を25%低下させることを約束した。もしこの目標が世界中で実現されるならば世界の雇用率は5.3%高まる可能性があるとしてILOは見ている。

こうした結果によって、経済が大きく成長し、2025年に世界のGDPは最大で3.9%、つまり5.8兆ドルほど高まるだろう。男女格差が最大の北アフリカやアラブ諸国、南アジアがその恩恵を一番多く受けることになる。IMFが2013年11月に出した地域経済見通しによると、中東・北アフリカ、アフガニスタンや

パキスタンといった地域が男女格差をこの見通し発表までの10年間にその他の新興市場国や発展途上国の平均の3倍から2倍の水準まで引き下げられる程度に女性労働参加率を高めることができていたと仮定するならば、同期間にGDPを累計1兆ドル増やすことができていたであろうということがわかって

いる。女性の労働参加を促進することに伴う経済的な利益は明確であるが、これ以外にもプラスの効果が存在する。女性がさらに健やかで幸せな生活をおくれるようになり、彼女たちが影響力を発揮し、人生の目標を達成するために、より多くの機会が提供されるようになる。

そして、こうした良い効果はデータによっても証明されている。ILOの報告では、調査対象となった女性たちの70%が、現在の雇用形態を問わず、有給の仕事のほうが望ましいと回答している。しかし、世界的に見て、50%を超える女性たちが職に就いていない。これが示すところは、労働に参加する能力や自由を制約する壁に女性たちが直面しているということだ。

この欄はILO発表の『世界の雇用及び社会の見通し－女性動向編 2017年版』に基づいて作成。

の仕事では安定した収入を得られていないし、仕事が保障されているわけでもない。ベン＝ムフニが置かれた状況は女性が直面する雇用の問題をよく表している。チュニジアの「革命」は女性がより多くの機会を得られるよう扉を開くことを約束していたが、その革命後、国内の女性の失業率は13%ポイント上昇し、40%に達した。男性と比較すると、これは2倍近い数字だ。



アラブの春の後、モロッコのムハンマド6世はフェミニスト団体からの圧力もあり、2011年に憲法を改正し、男女平等を保障した。経済の状態が芳しくなく、政府関係者は女性の労働参加率を高めることで、勢いをつけることができるのではないかと考えたのだ。この動きは多くの人々から賞賛を浴びた。

6年が経過したが、伝統的な慣習はほとんど変わらないままである。女性たちは、育児休暇や手頃な価格の保育など基本的な福利厚生を利用できず、仕事をやめざるをえないと不満を口にしている。アビア・エルダウディはカサブランカのグラフィックデザイン会社で経理の仕事をしていて、彼女もまた離職しなければならなかった。双子が産まれた後、公務員の夫は彼女が家庭にとどまることを期待した。

「夫は他人に子どもの面倒を見てもらうなんてこと、全く受け入れようとしなかったわ。もし彼がその気になったとしても、頼れるものは全くなかったけど。ヨーロッパやアメリカのように、手頃な料金で利用できる保育サービスなんて、ここにはそもそもないもの」とエルダウディは話した。

現在37歳のエルダウディは双子が学校に通い出したら仕事に復帰するものだと思っていたが、10年後の今でも専業主婦のままである。

「何十もの仕事に応募したけど、午後早くに子どもを迎えに行く必要のある母親を採用したがる人はいないわ」と彼女は言った。モロッコの都市部では、女性の就業率は15%に過ぎない。一方で、男性の62%が仕事に就いている。法制度改革に加えて、手頃な価格の保育や学童保育などの具体的な施策によって、女性に対する社会の見方を変えるための下地作りができるのではないかとエルダウディは強く感じている。



サウジアラビアでは、石油価格が下落するまで、経済多様化の手段として女性が意識され始めることはなかった。2013年に、故アブドゥッラー・アブドゥルアズィーズ国王が小売業や接客業での女性の就業を許可した。また、同年に女性たちが初めて弁護士の活動免許を受け取っている。サウジアラビアの女性たちは現在、教育や医療などでも仕事をしている。2017年9月26日にサウジアラビアは女性の運転禁止を撤廃することを発表した。サウジアラビアには実質的に公共交通機関が存在しないので、これによって女性たちはより自由に移動できるようになる。

しかし、サウジアラビアは女性にとって働きやすい国ではない。女性に対する男性の後見人制度が公式に存在しており、この制度の下では父親や兄弟、夫、さらには15歳以上の息子が女性に関する法的な決断を下すのである。男性の後見人の許可なしには、女性は旅行も勉学も、結婚も許されておらず、手術を受けることすらできない。

現在30歳のファトマ・エルマトルドのような女性たちには、母親世代と比べると大きな進歩があったが、それでも彼女たちは女性であることが理由で壁にぶつかっている。エルマトルドの父親はサウジアラビア東部にある街の出身で小学校教育しか受けていなかったが、娘が首都リヤドにあるキングサウド大学に進学することをしばらく渋ったのだ。

「父親として心配していたのはわかるけど、私のことを信頼して、自分のことは自分で決めさせて欲しかったわ」

エルマトルドは心理学修士号を取得し、心理士としてハフル・アルバティン精神病院で働いている。ここでの年収は3万ドル近くだ。病院と食料品店の近くにアパートを借りている。しかし、家族から500キロほど離れていることが「精神的な重荷になっている」と彼女は話している。毎週末、高額なタクシーかバスを使って実家に帰っている。

病院では男女差別が理由で女性たちが能力を完全に活かせていないと彼女は感じている。「管理職は女性に偏見を持っているわ。マネージャーたちは男性に責任ある役割を担わせようとするの。女性たちは基本的な仕事しか任せてもらえなくて、そうした仕事だと昇進するために必要な技術的な能力を発揮することができないの」と彼女は語った。エルマトルドの上司は休暇に出る場合、必ず男性の部下を指名して不在中の部署を仕切らせている。

サウジアラビアは2020年までに女性の労働参加率を現在の22%から28%まで高めることを目標としている。経済的、政治的な影響力を持つ女性たちの多くが富裕層の出身である。エルマトルドは将来、自分のキャリアにどのような可能性があるのかを心配している。彼女は独身だが、結婚した場合、また別の課題に新たに直面することになるだろうということを理解している。後見人が新たに変わり、子どもを持った場合、職場では家庭との両立を支援するような施策がとられていない。

しかし、希望の光が見えてもいる。女性の運転解禁や、後見人制度を定めた王国法のいくつかが6月に緩和されたことだ。変化は進行中だが、エルマトルドが恩恵を受けられるほどのスピードで進むかはまだわからない。

ナジラ・ファティは元ニューヨーク・タイムズ特派員で『The Lonely War: One Woman's Account of the Struggle for Modern Iran (孤独な戦い—ある女性の目から見た現代イランの課題)』の著者。